

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間

会報 No.46

二〇〇八年七月二三日発行

川崎市幸区古市場 2-109
京浜協同劇団内
TEL 044-511-4951
郵便振替 00250-3-18369

これからも明るくい妄想の中で遊びたい

——「ミスター・チムニー！ 天空百三十尺の男」初演、再演を終えて

和田 庸子

「満場の拍手、拍手、拍手。お客さんの手、手、手。波打つように手が揺れる。ステージには、演じきった劇団の皆さんが笑顔で勢ぞろい。私は、安心感と会場いっぱい広がる喜びの空気の中で涙がこみ上げるのを押さえることができませんでした（後略）」

この文章を寄せてくださったのは、湘南で生涯一教師として働き、定年を迎え、今は日々コカリナを吹きつつ、晴れた日は農作業をして暮らすある男の人です。まるで、宮沢賢治のような……。現代の「宮沢賢治」は、なかなか多忙です。奥さんとともに、京浜協同劇団公演のための事務局に加わり、オルグに、チケット代回収に車を走らせ、湘南を駆けめぐる日々を数ヶ月にわたって過ごしました。その人——小野強さん、そして靖子さん、保坂さん、桑原さんはじめ茅ヶ崎「成功させたい会」のみなさん、本当にありがとうございます。

この茅ヶ崎公演で「ミスター・チムニー！ 天空百三十尺の男」は全公演の幕を閉じました。初演・

再演を通じて全ステージ満席、高校生から九五歳の高齢者まで三千名を超えるお客様を迎え、活気ある舞台をつくり、劇団五十周年の第一歩を元気に踏み出すことができましたように思います。

私が、この作品を書くころと思った根底には、「文化の仲間」や観客の皆さんの「働く人々を励ます演劇、京浜らしい創作劇をやってほしい」という、熱い思いを実現したい、という気持ちがあつたことは確かです。それはもちろん、私たち劇団の願いでもありました。

その思いは、少しでも達成できたのだろうか？といま静かに考えるとき、私は、この脚本を書き始めた二〇〇四年七月から、今日までの四年間を振り返って、作者として、劇団員として、また制作の一端を担った実践的感情をもってしても、「皆で力をあわせて、ひとつの目標を実現できた」と率直に思います。

四〇〇通以上ものアンケート、メールを読み、直接間接の感想をお聞きすると、私たち自身、本当に励まされます。たとえば、首都圏青年ユニオンの青年は「仲間を大切にすること、そして自分自身をつらぬくこと、人が生きるといふことの大切さが伝わりました」と書き、埼玉から見に来てくださった六六歳の女性は「あの時代、私が生まれる前、こんな青年がいたことを、そしてきつと今もあちこちにいることを信じさせてくれる舞台でした、ありがとうございます」また、「時事問題を絡ませながらの問題提起、時代背景への落とし込み、若い世代に訴える力強さ。多くの人に見てもらいたい！ ずずおばあちゃんが立ち上がったとき涙がこぼれました」（二八歳女性）、「五十周年おめでとう！ 題材脚本・演出・演技すべてにおいて、五〇年がんばりぬいてきたその意気込みを感じました。これからも時代に立ち向かって、いい芝居をつくってください」（六八歳男性）、こんなふううに受けとめていただき、本当にありがとうございます。

久々の東京公演は、かつこよくいえば「大冒険」、リアルにいえば「無謀な賭け」ともいえる試みでした。「川崎」で起きた事件にまつわる話であり、川崎、横浜のお客さんに愛された芝居であるにしても、東京のつながりのうすい観客に通用するのか、それだけの演劇的内容を持っているのか、一抹の不安もありました。でもそれを確かめるためにも、やはり大勢のお客様に来ていただかなくてはならない。それは、作者としても当然の仕事でした。城谷さんを先頭に、民主団体を中心に約七五団体をオルグしました。最初はなかなか手ごたえをつかめず、苦しい思いをしましたが、「時を撃て——小林多喜二」プロ



「ミスター・チムニー」の舞台①

(写真：長坂訓弘・以下同)

デューサーの植田さんや、台東区の龍野さん、ピアニストの鈴木たか子さん、その他大勢の皆さんに大変お世話になりました。

東京オルグで最も印象的だったのは、首都圏青年ユニオンのメーデー当夜祭に参加したときのことです。最初に「ドレイ工場」の上映、私たち（古木君、土くれの斉城さんと和田）の脚本の朗読、と続いたのですが、そこではまさに六〇年代のたたかいと、戦前のたたかい、そして青年ユニオンのような現代の労働者のたたかいが、一目瞭然につながって、その場で表現されたのです。「歴史はこうして、すすんでいくのか……」、そうだ、今を生きるためにこそ、「チムニー」はむしろ「求められている芝居」なの

ではないかと思いました。感動的な一日でした。こうした経験を踏みながら、当初の「二抹の不安」は、オルグをやればやるほどサーッと晴れて行き、私は最後の最後までお客さんへの呼びかけをつらぬきました。こうして東京公演も、満席・好評のうちに終わることができました。

今回のこのような「成功」が成立した要因に、なんととっても演出の杉本さんの力が大きいことは誰から見ても異論はないと思います。役者はずいぶん鍛えられたし、劇団全体の演劇に対する考え方も「洗われた」ような気がします。稽古場は、いつも創造的でおもしろかった。「創造的」でない稽古場ってあるんですか、と質問されそうですが、あるんですよ、往々にして。また、こんなことを私がいうのはおこがましいのですが、杉本さんは基本テキスト（脚本）に対して真摯です。作者にも役者にも、率直です。テキストの魅力を生かし、欠点や未熟さをカバーする。観客を楽しませる。そのために役者がどんな仕事をしなければならぬかを明確に提起する。それを実行できるように、「どんなキタナイ手をつかって」も執拗に役者に奉仕する。それでもわからない役者にはしばらく時間をおく。そのうち、ふつう役者は「自分勝手に落ちて」いきやすい。その瞬間、相当きびしくものをいう。その後も、良くはならないまでも、それ以上落ちないように、目を見張っている。けっして突き放さずに。「演出者の仕事とは何か」を一〇〇回の稽古を通じて、ゆっくりわかりやすく教えていた日でもありました。

心から、お礼を申しあげたいと思います。ありがとうございました。また、大変な役を最後まで背負い、演じ通してく

れた古木くん、本当にありがとう。文字通り「背負われた」のに、精一杯受けとめて、立ち続けてくれたことに感謝します。「煙突男」の心と、今回の芝居の世界を、あなたが生きてくれたからこそ、成り立ったお芝居でした。お疲れさまでしたね。

私が今回の「創作体験(?)」のなかで感じている「脚本を書く」とは、あえていえば、「面白い妄想の世界で遊ぶこと」です。普段の劇団活動や、制作の仕事とはまったく違うものでした。時には思うように遊べないこともあったけれど、できればこれからも、もっと思う存分楽しみたい、遊びたい！

そんなわけで、劇団、「文化の仲間」、そして河原町と古市場の家族に、今後もしも迷惑をかけ続けると思いますが、どうぞよろしく願います。

(京浜協同劇団・脚本)



「ミスター・チムニー」の舞台②

いい舞台を世の中に送れるよう お互いに頑張りましょう

浅利 倫映

私が「京浜協同劇団」の芝居を初めて観たのは、もう20年以上も前になるでしょうか、「ある馬の物語」という作品でした。アマチュア劇団ということ、それほど期待していなかったのですが（すいません）とてもエネルギーシユな舞台で驚いたことを覚えていています。今回の「ミスター・チムニー」という舞台も「久々にエネルギーシユな舞台を観たな」と



「ミスター・チムニー」の舞台③

まず思いました。

私は「煙突男」の話を今まで聞いたことがありませんでした。治安維持法があり、自分の意見を自由に言うこともできなかったこの暗黒の時代に、こんな突拍子もない形で自分の信念を世の中に訴えた人がいたというのは正直驚きでした。でも、ひとつ残念だったのは、煙突に登るきっかけとなった女工さんたちの悲惨な生活ぶり、あまり伝わってこなかったことです。「女工哀史」にもあるように、この時代女工さんたちは（他の労働者も同じですが）何の人権もなく、命さえ軽視される状況で働かされていた。ここがもつとリアルに胸に迫ってくれば、この突拍子もない行為がもつとリアリティのあるものになったのではないのでしょうか。とはいいえ、この深刻になりがちな内容を、嫌みなく、押し付けがましくなく、時に明るく表現できたのは、主役の男の子が持っている柔らかい雰囲気のおかげもあつたのでしょうか。

久々にこの劇団の芝居を観て、プロとアマチュアの違いはなんだろうと考えさせられました。私たちの劇団はプロ劇団ということになっていきますが、残念ながら職業劇団にはなれていません。一部の劇団員を除いて、アルバイトをしないと生活できないし、他の企業で正社員として働いている人さえいます。劇団活動に集中すればするほど生活は苦しくなっ

て、みんなちよつと生活に疲れているかなと思うところが多々見受けられ。一方「京浜協同劇団」の皆さんは、芝居を観ただけの感想ですが、仕事をもちながらも芝居に集中し、何よりも、芝居が好きで演じるのが楽しいというエネルギーを感じました。暗黒の時代に自分の信じる道を行く煙突男の静かなエネルギーと重なって、うちの劇団に今足りないものは、このエネルギーじゃないかなと、そんなことを考えながら舞台を観ていました。

煙突男のように、今の生きにくい世の中を変えたいという情熱を忘れず、少しでもいい舞台を作りたいというエネルギーを持ってこれからも劇団活動を続けていきたいと思えます。これからも、いい舞台を世の中に送れるよう、お互いに頑張りましょう！

（東京芸術座）



「ミスター・チムニー」の舞台④

煙突男雑感

鈴木 淳

スペイン10日間の旅の疲れもとれずボーとした状態の朝食時に二村女史より電話があり、青天の霹靂ともいえる「煙突男」観劇の感想文の依頼があった。

断る巧い言葉も見つからず何となく引き受けたものの、さてこまった。大体この劇自体何時見たのかさえ、もはや記憶が曖昧となっていた。それでも、確か妻のたか子さんから京浜の劇の東京公演が両国で行われるので一緒に行こうと誘われ、両国には昔JR駅のコンコースを利用した地ビールが呑めるビヤホールがあり、観劇後の一杯を楽しみにしていたことを思い出す。(実際は昔のビヤホールはもはやなく、地ビールは夢だった)

「格差社会への皮肉? 若者の(蟹工船)ブーム」こんな見出しの新聞のコラム記事を目にした。ワーキングプアと呼ばれる若者たちの間で本物のブームとして小林多喜二の代表作(私は読んだことはないが)の同書が真剣に読まれるようになってきた現象自体が今の為政者の失政に対するブラックジョークではと書かれていた。

ところで劇の主人公煙突男・田辺潔が変死(多分暗殺)したのと、この小林の虐殺時期が一九三三年と同じであったことを知り、深刻な社会背景の時期

をモチーフとした劇であったことを思い起こした。しかしながら私にとって劇の印象は、こんな厳しい時代性とは離れた、何か妙に切なく、懐かしく、ちやうど「三丁目の夕日」にも似たテレビドラマを見ていたような感であった。

大体がまず劇タイトルが楽しい。「ミスターチムニー・天空百三十尺の男」このタイトルを目にしたとき、唐突だがデイズニー映画メアリーポピンズが思い浮かんできた。(チムチムニー、チムチムニー、僕は煙突掃除屋さん)、屋根の上を歌いながら踊っている光景だ。(天空からの連想は友情と冒険のアニメ、天空の城・ラピュタ。そして「百三十尺の男」と来れば不撓不屈の代名詞・四千万歩の男と繋がる。なんとすごいメタファーを秘めたタイトルではないか。

主人公田辺青年は、巨大な風車に突進する憂い顔の騎士のような悲壮感や滑稽感は微塵もなく、初々しい顔で巨大な煙突を愛し、青春映画のように声高らかに正義を叫んでいた。

音楽も小気味よい。あるときは軽く、あるときは甘く、そして懐かしく、ちやうど楚々とした人間愛を描くイタリア映画のバックに流れる音楽にも似た余韻を備える。

装置がすごい。張さんの装置にはいつもインパクトがある。劇の主題を「百聞は一見にしかず」がごとくドカンと表現してしまう。特に今回は本物を作ってしまったことがすごい。舞台転換で丁度児雷

也が蝦蟇の上にドロドロと現れるがごとく煙突があらわれたのは圧巻。ただ稽古場(スペース京浜)公演の煙突の存在感はもつと凄かったらしいが。

護柔さん実に嵌まっていた。護柔さんの良さは演技が巧くならないことだどつくづく思った。藤井さんはいつも嵌まり過ぎていりし、何時までも声がいね。若菜さんは渋いし。

煙突男は好評につきの再演で今回も非常に高い人気を呼んでいると聞く。煙突男は電車男に通ずる。主人公の一途な姿勢、わかり易い生き方が共感と呼ぶなどと言ったら和田さんや演出者に怒られるか。(ピアノスト・鈴木たか子の連合い。三十数年の京浜との繋がりは酒の会がほとんど)



「ミスター・チムニー」の舞台⑤

京浜の演劇・戦後編 その序章⑦

「労芸」という名の劇団が

誕生したのだが

須田 輪太郎

川崎市役所内の「地区労」に神奈川自立劇団協議会の事務局が置かれていた。六十年後の今思うと、「労働者の街かわさき」だからこそ実現した、まさに、「天井の突き抜けた時代」を象徴するような、働く者の文化の拠点だったといえるだろう。

〳〳〳川崎地区労のことを書いた序章②で、地区労常任は、秋葉栄一・池上善五郎の両氏と書きましたが、池上さんの「善五郎」は間違い「藤五郎（トウゴロウ）」に訂正させていただきます。これは川崎文化会議議長の城谷護氏のご教示です。〳〳〳

記録めいたものは皆無に等しく、数枚の写真（クロサン撮影）とボクの記憶だけでこの文章を書こうというのだから、人名の間違いなどがどうしても出て来てしまう。もっと丹念に資料を検索してから書かねばダメだと思うが、それとは別に、「日本史年表（東京堂出版）」の記載を手掛かりに、六十年前の民主的文化運動がGHQと日本の反動勢力によって抑圧されていたあの時代、多くの自覚した演劇人たちが逆流する状況にどう立ち向かったのか、そういうことも書きたい。京浜協同劇団のコピーを毛

じると「あの日、この地で、あの人々が」どんな思いで、どんな言葉で、演劇活動をしていたかを〳〳。六十年前の川崎の演劇を記録しておこうといったのは、京浜協同劇団の俳優だった故原科清さんだ。「労芸から建設座へのあの頃は、芝居の仲間が集まるだけでも大変だった」といった「キョちゃん」を懐かしく思い出す。逝去から既に六年が過ぎた。

神奈川自立劇団協議会は、四八年秋のコンクールが終わると、衰退の兆候が見え始めた。東芝・富士電機・日本冶金などの企業内演劇サークルが、協議会を脱退するとか、劇団が潰れるとか、そういうことではないのだが、新作が創られずサークル同士の交流も疎遠になっていった。

いうまでもなく、アメリカ力占領軍の対日政策の変更が、停滞していた日本の資本と企業を元気づけ、労働組合の無力化、あるいは御用組合化を一齐にやり始めた。労働組合に支えられて活動してきた演劇・美術・文学などの企業内サークルは軒並に活動停止の状態に陥る情勢変化をもたらした。

「共産主義の防波堤」としての日本に改造するGHQの政策は、日本企業を活性化し利潤追求を阻む民主化とか労働条件の改善とかいう課題を消去して米軍基地を拡大強化する方向に進み、それが六十年後まで続く日本の米国追隨の原型を作ったのだ。

神自協の事務局長だった三浦雅生さんは、自立劇団が潰れることを予知していたのか、神自協コンクールの前から三浦さんを代表者に据える劇団「労芸」を作り、「結婚申込」アイルランド劇の「月の出」など、小規模公演をやっていた。芝居は見えていないが、地区労の事務所での稽古を何度か見かけた。三浦雅生・原科清・松岡暁子・郷里健の諸兄姉のほか、静浦さんという可愛い娘さんと十七歳の少年が「劇団労芸」の全員だったと記憶している。

原科清さんの親友だった郷里健（ゴウリ ケン）氏は二年後に新協劇団が分裂して出来た「劇団中芸」で俳優をやり、五四年九月、津軽海峡の連絡船「洞爺丸」の転覆事故で亡くなられた。

故黒澤参吉氏が劇団労芸に入り、ボクも誘われたが、返事を渋っていた。勤務先の国鉄大船工場から遠隔地へ配置転換される噂もあり、この際退職するならプロの役者になるうか？と考えていたからだ。

劇団労芸は「分水嶺」という三浦さんの創作戯曲の稽古に入った。この時期俳優座が公演した「火山灰地」を思わせるような超大作に挑んだのだが、この作品は遂に未上演で終わる。労芸が稽古場にしてきた川崎地区労は神自協事務局ごと市役所から追いやられ、労働者文化が拠点を失う事態が相次ぐ一九四九年の春だった。

（つづく／人形劇団ひとみ座・前代表）

定期総会の延期について

世話人 山木 健介

昨年九月九日に第一一回定期総会を行い、今年の秋には第一二回定期総会を開催する予定でいました。ところが、劇団創立五十周年ということで来年を中心に記念行事を行うことが決まり、文化の仲間としても全面協力体制をとることを世話人会で決めました。記念行事の詳細は、劇団五十周年記念企画プロジェクトチームで検討中です。

詳細が確定したところで定期総会を開催し、文化の仲間として全面協力を確認したいと考えています。記念企画の確定時期と総会議案の作成日程、そして劇団の公演日程などを考えると、年内の開催は難しいので、来年上半年期での総会開催とさせていただきます。

なお、二〇〇八年度の会費納入についてはよろしくお願いいたします。個人会費は年額三、六〇〇円、家族会費は年額五、〇〇〇円です。

二〇〇八年夏、平和の企画

今年八月三十一日(日)午後、平和をテーマとした企画を開催します。内容についてはまだ企画を練っている段階ですが、ピアノソナタ月光、荒木栄の歌、劇団の合唱隊によるかつての劇中歌などを検討中です。

京浜協同劇団 50周年 記念行事スケジュール

50周年プロジェクト事務局作成・2008.6.22 現在

年	冬 (1月～3月)	春 (4月～6月)	夏 (7月～9月)	秋 (10月～12月)
2008	チムニー 準備 (稽古)	No.77 公演(記念公演第1弾) チムニー 川崎 4/25～ チムニー 東京 5/17～ チムニー 茅ヶ崎 6/7 「池上幸豊」たちあげ	08年総会 7/8・9・10 演劇講座 7/19・20 平和の企画 8/31 関東Bゼミ 「池上幸豊」稽古	No.78 公演(記念公演第2弾) 「幸豊」 中原 11/12・13 「幸豊」 教文 11/22 「幸豊」 麻生 12/5・6
			CD製作(試聴) 記念誌(プランニング)	
2009	08年中間総会 CD発売準備 記念誌発行 準備 文化祭	演劇まつり スタート (作品/演出 未定)	演劇まつり 7/25・26 09年総会 全日本演劇フェスティバル 岩手・北上 (8/28～30) 秋準備	記念レセプション (記念誌発行) CD発売 記念誌発行 小作品上演 (No.79) (記念公演第3弾) CD完成コンサート
	No.80 稽古開始	No.80 公演 (作品/演出 未定)	10年総会 演劇講座 No.81 稽古開始	No.81 公演 (作品/演出 未定)
2010				

民衆のために生きた幸豊

市民劇の稽古始まる

制作 城谷 護

二年前から準備を重ねてきた市民劇の稽古が七月五日、スタートしました。作品は、多摩区在住の青少年演劇作家、小川信夫氏の書き下ろし戯曲「川崎の海を拓いた池上幸豊とその妻」です。演出は元前進座の演出家、香川良成（よししげ）氏です。今年



各界から 25 名の実行委員が選ばれ会議がスタート (2008.4.25)

一月から一二月にかけて市内三会場で上演します。これは三年前、田中兵庫（休愚）を描いた「多摩川に虹をかけた男」に続く第二弾ともいうべき作品で、川崎の歴史上の人物を劇化上演するシリーズものです。

江戸時代の中期、池上幸豊は私財を投げ打って川崎の海を埋め立て、貧しい農民のために土地を分け与えます。それは池上新田と呼ばれ、多くの農民を救っただけでなく、川崎の農業を発展させる基礎となりました。また、砂糖を作る技術を開発、近代化に大きく貢献したといわれます。

この劇には市民から公募した約二〇人と、京浜協同劇団、劇団川崎演劇塾、超電磁劇団ラニヨミリなどの演劇人二十数人が出演、スタッフや実行委員会委員などを合わせると総勢百人、そして観客も四千人という大イベントとなります。川崎市から四〇〇万円の助成、文化庁からも約二六五万円の助成が決まりました。

稲毛神社宮司の市川緋佐磨さんを委員長に二五名の実行委員会も本格的に動き出しました。

京浜協同劇団は創立五十周年の記念公演の第二弾ともいうべき仕事として劇団員総がかりでこの公演に取り組みます。制作に城谷護、水野哲夫を、演出助手に内田勉を送り出しているほか、キャスト、スタッフ等で奮闘する予定です。

★川崎郷土・市民劇★

「川崎の海を拓いた 池上幸豊とその妻」

小川信夫 作／香川良成 演出

2008年 11月 11日（火）夜 6時 30分 12日（水） 昼 3時 エポック中原

22日（土） 昼 2時・夜 6時 30分 川崎市教育文化会館

12月 5日（金）夜 6時 30分 6日（土） 昼 2時 麻生市民館

詳細が決まりましたら改めてお知らせします

◎文化の仲間通信◎

◆第26回 みんなでつくった平和公園

みんなでつくろうコンサート2008

日程 7月27日(日) 開演 午後五時

会場 中原平和公園野外音楽堂 入場無料

出演者 合唱団いちばん星/コールアゼリア/合唱団きずな/神奈川合唱団/ねぎぼうず/アコー

ディオン神奈川合同/松本良江/吉川敏男/松平

晃/田辺肇/松木伸介/菅裕紀 ほか

主催 川崎平和公園コンサート実行委員会

◆第10回 響け!みやま太鼓ミーティング

く打つ 響く 広がりふれあう まちづくりく

日程 8月23日(土) 第1部午後一時く/第2部午

後三時く/第3部午後六時一〇分く

会場 宮前市民館大ホール/宮前区役所市民広場

入場料 無料 ただし、第1部は事前申込制(車で

のご来場はご遠慮ください)

出演者 第1部 林英哲&英哲風雲の会 第2部

神六太鼓保存会/蔵敷こども太鼓/平保育園/ど

んどこ/南平こども樽太鼓/東有馬太鼓連/宮前

エイサー隊/宮前区文化協会 第3部 大塚太鼓

/川崎太鼓仲間響/野川親子太鼓大地/里空

主催 太鼓ミーティング実行委員会・宮前区

問合せ 宮前区役所地域振興課

電話 〇四四・八五六・三一二五

当日、浴衣をお持ちください。宮前文化協会の皆
さんによる着付けが受けられます。

◆第4回 まあくどれ・さいわい コンサート

明日へのおくりもの

日程 9月28日(日) 開演 午後二時

会場 ミューザ川崎市民交流室

参加協力券 八〇〇円 コーヒー付

指揮 山寺圭子 ピアノ 山内千晶

プログラム 第一部 明るく元気な私たちの今 小

さな秋/二つの古い歌/かえるのけんか 第二部

平和への願い 普天間の子守唄/聞いて地球の声

/無言館 第三部 今こそ伝えたい!沖繩の心

芭蕉布/ていんさぐの花/心つないで ほか

問合せ 新日本婦人の会/幸支部

◆うたごえ運動60周年記念

2008年日本のうたごえ祭典 in 東京

①お江戸のにぎわいコンサート 全国から郷土のう

たと踊りが大集合!

日程 11月22日(土) 午後五時く

会場 パルテノン多摩

②60周年記念音楽会 外山雄三指揮、憲法の心を歌

う交響曲「五月の歌」全曲演奏 ほか

日程 11月23日(日) 午後五時三〇分く

会場 日比谷公会堂

③大音楽会(希求「ねがい」) 一〇、〇〇〇人が

歌い交わす大音楽会!

日程 11月24日(月・休) 午後一時く

会場 有明コロシアム

このほか、各会場で合唱発表会、オリジナルコン
サートなどが開かれます。

入場料 会場別に二五〇〇〜六〇〇〇円(お問合せ下さ

総監督 池辺晋一郎

主催 「60周年記念2008年日本のうたごえ祭典

in 東京」実行委員会

問合せ TEL 〇三・三二〇〇・四九七七

(東京のうたごえ協議会内)

utago60@ky-main.jp

http://utago60.main.jp

■文化の仲間ギャラリー■

竹間テル子 ②

